

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2021

課題番号：20K12887

研究課題名(和文)学校教育における演出付合唱作品の歴史の変遷：《オルフォイス》から《追分節考》まで

研究課題名(英文) Historical transition of chorus works with direction in the school education:
from "Orpheus" to "Oiwakebushi-ko"

研究代表者

仲辻 真帆 (Nakatsuji, Maho)

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：60822715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀末から20世紀中頃に日本で上演されたオペラやシアターピース(この研究では「演出付合唱作品」と呼称)について、書き込み入りの出版譜、作曲家による自筆譜、上演時の写真等の調査から創意思図や演奏実態を明らかにした。今回は特に東京音楽学校と関連した作品を考察対象とし、音楽教育の潮流をふまえて各作品にアプローチした。この研究において明治・大正・昭和期(近現代日本)の音楽史を歴史的・教育的に考察することにより、それぞれの時代の音楽文化の特徴や音楽観の変容をも浮き彫りになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近現代日本の音楽を創作や教育の観点から検証することは、異文化の受容(移入)や音楽の社会的位置づけとともに、我が国の「音楽」を巡る用語や概念、価値観などの歴史の変遷をも射程に入れることである。本研究は、明治期以降の日本の音楽文化について、創作や演奏の現場で実際に課題となっていたことを重点的に追究することで、それらを進歩史観に基づく認識ではなく今日に連なる多様な試行錯誤の集積として跡付けた。本研究における考察結果は、近代日本の作品研究に実践的な見地を提示すると同時に日本の音楽教育の歴史的検討にも資するものである。

研究成果の概要(英文)：This study discussed some operas and theater pieces (referred to as "chorus works with direction" in this study), which were performed in Japan from the end of the 19th century to the middle of the 20th century, and clarified the performance intentions and the actual performance from the investigations of published scores with user's writings, autographs by the composers, and the photographs at that time. In particular, this study focused on works related to the Tokyo Academy of Music, and approached each work based on the trends in music education. By considering the history of music in the Meiji, Taisho, and Showa eras (modern and contemporary Japan) historically and educationally in this research, the characteristics of the music culture of each era and the transformations of the view of music became evident.

研究分野：音楽学

キーワード：近代日本音楽 音楽教育 合唱 音楽史 西洋音楽受容 東京音楽学校 オペラ シアター・ピース

1. 研究開始当初の背景

本研究は、明治期から昭和期の近代日本音楽史の一端を再考するものである。音楽文化の歴史的研究において、当時の文脈の中に身をおくことの重要性は先行研究で指摘されている通りで(渡辺 2010 など)、例えば明治期の《オルフォイス》上演時には何が課題となりどのような音楽が希求されたのか、というように同時代的観点からの考察は必須である。そのうえで、考察対象がいつのものか、どのような歴史観、音楽観が背景にあるかといった点を今日的観点から検討することも重要となる。

明治期以降の西洋音楽受容史に関する著書は比較的早い時期から複数刊行されており(園部 1956、堀内 1977 など)、貴重な資料や証言に基づく記述が含まれているものの、改めてこれらの記述を見直してみると、「本格的な」西洋音楽の受容史として、「高度な」方向へむかって「発展」していくという、進歩史観を想起させる記述もある。しかし実際には、いずれも新しい技術を修得するため試行錯誤を繰り返してきた「過程」として捉える必要があり、「進化」と「変化(変遷)」の区別を意識するべきである。

また、先行研究(『明治音楽史考』、『本邦音楽教育史』等)で示されてきた「教育音楽」と「芸術音楽」という区分についても、近代日本における「音楽」の概念そのものと併せて考察する必要がある。

こうした点をふまえて、本研究では近現代日本の音楽に対して実践的・教育的な見地から考察を深めるとともに歴史の変遷にとまなう音楽観の変容にも注視したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀後半から20世紀中頃に日本で上演されたオペラやシアター・ピース(身体的動作を伴う音楽表現で、特に劇場空間全体を用いた作品)を「演出付合唱作品」として、その上演を音楽教育との接点を追究しながら歴史的かつ実証的に跡付けることである。特に重要な三作品、すなわち《オルフォイス》、《ヤーザーガー》、《追分節考》について、それぞれ上演のねらいや演奏の実態を明らかにして比較検討することで、近現代日本の音楽史や音楽教育史がたどってきた軌跡とそこに内在する問題点を提示する。

考察対象に据えた三作品は、それぞれ近代日本の音楽研究領域では比較的よく知られた作品であるが、実際に創作や演奏において何が課題になっていたのかなどを詳細に解明した研究はほとんどない。そこで本研究では歴史的史料や作曲家の自筆譜などの一次資料調査を重点的におこない、表層的な情報把握ではなく創作・演奏の過程を視野に入れ「現場」に即した実践的な作品理解を目指した。

3. 研究の方法

まず、主要な研究対象の三作品について一次資料の調査をおこない、各作品の創作・演奏実態を明らかにした。そのうえで、それぞれの歴史的な位置づけを検討しながら三作品を横断的に考察していった。

作品ごとの研究方法は以下の通りである。

(1) 《オルフォイス》

日本のオペラ史に関する記述で《オルフォイス》に言及している例は少なくない。その理由は、日本人が西洋のオペラを初めて演出付きで全幕舞台上演したのが《オルフォイス》だったからである。しかしながら、実際の演奏がどのようなものであったのかを当時の使用楽譜等から細部にわたり検証した本格的な研究はほとんどない。本研究では、1903(明治36)年に上演された《オルフォイス》について、楽譜や写真、当時の新聞・雑誌批評等を網羅的に調査した。東京藝術大学の附属図書館および大学史史料室に歌詞が書き込まれた楽譜等の所蔵が確認されたため、その記載内容を調査した。さらに当時上演に関与していた人々の言説を洗い出し、演奏実態や上演時の課題を明らかにした。

(2) 《ヤーザーガー》

《ヤーザーガー》は、《Ja sager》《ヤーザーゲル》《イエスマン》とも表記される作品で、ベルトルト・ブレヒト Bertolt Brecht (1898~1956) のテキストにクルト・ヴァイル Kurt Weill (1900~1950) が曲をつけた。日本では、1932(昭和7)年に東京音楽学校奏楽堂で「学校オペラ」として上演された。本研究では《ヤーザーガー》上演時の写真や新聞・雑誌の批評文を丹念に抽出することで、上演の意図や演奏実態を詳細に究明した。さらに本作品を昭和初期の東京音楽学校におけるオペラ事情や教育状況との関連から考察した。

(3) 《追分節考》

柴田南雄(1916~1996)が作曲し、1973(昭和48)年に初演された《追分節考》は、合唱、朗読、尺八演奏等から構成される。指揮者がうちわを用いて番号や記号を提示することで合唱団

員が発声や移動を実行する。つまり即興性、不確定性を含み持った作品で、劇場空間性を活用した点にも独自性がみられる。

本研究で特に注目した点は、《追分節考》において《信濃追分》《上州馬子唄》《雲助唄》といった民謡が多用されている点と、その民謡を批判した上原六四郎の『俗楽旋律考』が朗読される点、そして民謡の音組織の分析・理論化に柴田独自の「骸骨論（構造模式図）」が用いられている点である。

本研究では、上記の着眼点から考察を深めるために、《追分節考》に関する手稿資料調査と関係者への聞き取り調査を試みた。さらに柴田南雄の著作や先行研究を参照しながら「骸骨論（構造模式図）」が具体的に《追分節考》にどのように応用されているのかを検討した。

上記の三作品の調査および考察を総括し、それらが近現代日本の音楽史上でどのように位置付けられるのか、また今日的見地からどのような課題が見出されるのかも検討した。

4. 研究成果

まず三作品について、それぞれの研究成果を述べる。

(1) 《オルフォイス》

本研究における《オルフォイス》に関する研究成果として、特に独自性のある部分は次のAとBに大別できる。A：明治～大正期に使用されていた楽譜の書き込み内容を詳細に明らかにし、翻訳の過程や演奏実態に踏み込んで考察を加えたこと。B：本作品を上演した東京音楽学校の当時の演奏会状況や教育内容と関連づけて検討したこと。

外国語の声楽作品に関して、原語の意味と異なる歌詞をつけて演奏されることが多かった明治時代に、音韻や意味に熟慮しながら音楽との関連付けを試みようとした《オルフォイス》の翻訳は、その後の訳詞の礎として大きな意義を有する。本研究では楽譜の書き込み内容を詳細に比較検討し、今回新たに、初演以後に別の歌詞でも歌われた可能性、森鷗外による翻訳との強い関連性、イタリア語での歌唱または学習の可能性も見出した。また、本作品の初演が歴史上で大きな意義を持つことに加えて、初演後も東京音楽学校のレパートリーとして機能し続けていた点も本研究において明らかになった。《オルフォイス》の初演およびその後の展開は、当時の東京音楽学校における演奏・教育との関連から捉えなおすと更に重要性が際立つ。

これらの《オルフォイス》に関する研究成果は、2020年度と2021年度に東洋音楽学会第71回・第72回全国大会で口頭発表した。

(2) 《ヤーザーガー》

本研究では《ヤーザーガー》日本初演の企画から上演までを詳細に追跡し、当時の批評内容も複数確認した。椅子やついたて等による軽微な装置が用いられ、衣装も普段着で演じられた《ヤーザーガー》では、多彩な楽器によるオーケストラが演奏を担った。上演時の写真から、黒い幕で覆われたパイプオルガンを背景として舞台中央でソリストたちが演じ、舞台の上手に約30人の管弦楽団、下手に約40人の合唱団がいたことがわかる。（管弦楽団の中には海軍軍楽隊員も3人いた。）合唱団は女性の人数が男性の約2倍で、洋服の男性と和服（数名洋服）の女性が舞台上にひしめくように立っていた。

この上演に関しては、演目に新規性がみられたこともあり当時の新聞や雑誌で東京音楽学校の「アカデミー」としての在り方を問う声も挙がったが、演奏や聴取をした同校の学生たちには教育的にも心理的にも多大な影響をもたらした。また、東京音楽学校では明治時代の《オルフォイス》以来「オペラ」が上演されておらず、《ヤーザーガー》以後も太平洋戦争後までオペラ上演が実施されなかったことから、本作品の上演意義が歴史的にも大きかったことを指摘できる。

《ヤーザーガー》に関する本研究の成果としては、2021年度末に発行された『東京藝術大学音楽学部紀要』第47集の掲載論文がある。

(3) 《追分節考》

《追分節考》に関して、本研究では作曲者である柴田南雄の自筆譜や創作メモを調査し、「骸骨論（構造模式図）」との関連性や民謡の扱い方という点に注目して考察を深めた。また、海外公演を含む演奏批評も提示しながら柴田の創作意図や音楽観についても検討した。

本研究では、柴田の作品において実際に理論と実践がどのように結合していたのかを具体的に究明しようと試みた。《追分節考》の男声パートの一つである《追分馬子唄》に出てくる全ての音について、数と進行をマトリックスで表し、「骸骨論」を基に図式化した。

また、《追分節考》が1987年におこなわれた東京混声合唱団のアメリカツアーでひととき注目を集めていたことなども明らかとなった。

上記を含む《追分節考》に関する研究成果は、2020年度に日本音楽学会第71回全国大会で口頭発表した。

以上のように、研究対象とした三作品についてはそれぞれ個別の研究成果があった。これらをふまえて各作品を横断的に考察した結果として、特に次の3点において重要な論点が見出された。1：異文化の受容（「受容」という用語については引き続き検討が必要だが、ここでは受容

または移入としておく)、2: 体験的な学びの重要性、3: 音楽観や歴史観への留意。1点目の異文化の受容という点では、西洋音楽の移入にあたり創作や演奏の現場で具体的にどのような課題が浮上するのか、という重要なテーマについて本研究で複数の具体例を提示できたと考える。また、2点目の「体験的な学び」に関しては、明治期や昭和初期にオペラを手探りで上演する過程やシアター・ピースという上演形態の創作意図および聴衆への影響を確認する中で、自らが能動的に芸術実践のプロセスを経て音楽を体験的に学ぶ重要性があらためて認識された。上記3点目の音楽観・歴史観への留意については、ここで改めて述べるまでもないかもしれないが、本研究が明らかにした今日に連なる多様な試行錯誤の集積は、進歩史観によらない歴史認識や各時代の「音楽」の様相を考慮に入れた音楽観によってこそ理解できるものであることを確認しておきたい。

本研究で浮き彫りになった歴史的・教育的観点は、近現代日本の音楽文化や音楽教育を検討するうえで極めて重要な点であり、音楽実践を社会的意義という側面から考察する際にも有効であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 仲辻真帆	4. 巻 47
2. 論文標題 1930年代の東京音楽学校と教育劇《ヤーザーガー》の日本初演	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京藝術大学音楽学部紀要	6. 最初と最後の頁 53-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 仲辻真帆
2. 発表標題 柴田南雄の民謡観 《追分節考》および『俗楽旋律考』の再考
3. 学会等名 日本音楽学会第71回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 仲辻真帆
2. 発表標題 明治期の東京音楽学校とオペラ上演 《オルフォイス》を巡って
3. 学会等名 東洋音楽学会第71回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 仲辻真帆
2. 発表標題 團伊玖磨の作曲活動を巡る一考察 東京音楽学校時代からその後の創作へ
3. 学会等名 中日音楽比較研究及び團伊玖磨音楽創作研究国際学術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 仲辻真帆
2. 発表標題 明治期の東京音楽学校とオペラ上演 《オルフォイス》初演とその後の展開
3. 学会等名 東洋音楽学会第72回全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関